

## 新規購入主要文献解題

### 『ゴシック様式の復活』

Michael Charlesworth 著

Helm Information Ltd. 2002年4月刊行 (2040頁)

12-16世紀の中世西ヨーロッパでは、ゴシック様式が建築を中心にして絵画・彫刻・装飾などに広く用いられた。イギリスでは、18世紀中頃にはピクチャレスクな庭園が流行するようになり、また宗教建築だけでなく世俗的な建築物もゴシック様式でつくる中世趣味が盛んとなった。中世の再発見によって出現したゴシック・リバイバルは、19世紀になると最盛期を迎えたが、1870年代末には衰退に向かった。

政治家H.ウォルポールは、1747年に自邸ストロベリー・ヒルにゴシック様式の小城を建てて、『オトランド城奇譚』(1764年)を書いた。この新しい小説はイギリスのゴシック・ロマンスの先駆となった。その特徴は、高い尖塔やアーチなどの特異な外観と雰囲気によって引き起こされる人間心理の探求であり、超自然的な怪奇と恐怖の扇情主義であった。

イギリス・ロマン主義運動は、ゴシック・ロマンスの影響を受けている。その代表的詩人・批評家のS.T.コウルリッジは、中世期風の超自然的で奇怪な長編詩『老水夫行』(1798年)を創作した。彼はゴシック芸術の特徴を「無限なるもの—広大、莫大、完全とかではなく、現実の感覚的存在の領域内に限定されないものの象徴的表現」と表現している。

ヴィクトリア朝時代には、J.ラスキンは『ヴェニス石』(1851-3年)を書いてゴシック建築の礼賛を頂点にまでもたらした。さらに彼は芸術と社会・経済問題を結びつけていく。国会議事堂(1850年完成)や王立裁判所など数々のゴシック様式の公共建築物は、当時の文学の流れに大きな影響を与えた。

これまで建築と文学という二つの芸術のジャン

ルはあまり一緒に論じられなかったが、本論文コレクションは、ゴシック様式の復活と新しい文芸思潮誕生の流れを当時の全体的文化運動の一部として位置づけ、社会史、建築史および文学史からその関係性を浮き彫りにした貴重なコレクションである。  
(文責・岩崎豊太郎)



### 『俗文学叢刊』

台湾中央研究院歴史言語研究所編、台湾新文豊出版、2002年～継続刊行中

本叢書は台湾中央研究院の歴史言語研究所内の傅斯年図書館蔵の俗文学資料を影印したものである。本叢書に収められた資料の来源は、1918年(民国7年)に劉復が北京大学において結成した「歌謡徵集処」にある。北京師範大学において周作人が始めた歌謡研究会に続いて結成された歌謡徵集処は、10年後に民間文芸班となり、民間の「俗文学」の資料収集と整理、研究及び成果の刊行を始めるに至った。この時期の研究成果として、劉復編『宋元以来俗字譜』、劉復、李家瑞共編『中国俗曲総目稿』、李家瑞編『北平俗曲略』などは今日も利用されることの多い、民間文学、俗文学の基本的な資料集である。今回、こうした目録、リファレンス作成に用いられた原資料が影印、刊行されたことは、俗文学のみならず中国文学研究者にとって極めて大きな意味をもつ。しかもこれらの資料については、すでに書目稿が公開されており、また部分的ながらネット上で閲覧も可能であっただけに、その全体を直接手にとって見ることができるのは我々にとって大いなる喜びである。

ここに収められたものは、民間の芸能において演じられたテキストであり、その価値の重大さについて、我々はようやく認識をするに至ったに過